

快！米東亞據點に日章旗

比島に敵前上陸敢行

朝日新聞
 東京 5月30日 第1版
 比島に敵前上陸敢行
 快！米東亞據點に日章旗

新から情況の渋苦

〈出席者〉

大久保典夫
 桶谷 秀昭
 磯田 光一
 大岡 信
 橋川 文三

5 / 30 PM 1 : 00 | 1 番教室
 / 31 PM 1 : 00 | 1 番教室

派浪漫日本よびのし

度重なる暗黙の了解が等しく《私》に焼きついている。

《私》の内の深奥に動めき流動する未形が息を殺して棲息している。追窮し切開することができない、この得体の知れぬ流動未形に《私》は《私》自身の使命によってメスを入れねばならない時期が来ていることを、そそと足速やに近寄ってくる「風」に告げよう。

《私》の世代は60年安保の血吹きを知らない。しかしその敗北をアプリアリに受け止めてはいる。学生運動の昂揚期と謳れた67年の羽田弁天橋のパラダイスを知らない。只、呆然と見送っていたのである。知っていることは過渡期全共闘の敗北の後にやって来た浮浪の旅人であり、苦渋の情況に閉塞された待合人なのだということである。《私》にとってヒューマンズムの変質した自己否定の論理にのつった全共闘運動とは一体何であったのか。その問い掛けを忘脚として立ち去ろうとしている世代が《私》なのかも知れないのだ。

《私》はそのイロニイを胸中に押し込んで新しい地（価値）を求めようと試行している。そこには決して暗黒空間などというマンガ的空想の檻に逃げのびようとするのではなく、新たな対立の地を、獲得としての領域である新層を占有する為に、傷つき濡れた己れの間を踏みしめて出立するのである。

!! 前奏への獲得たな

企画特別委員会実行

「…日本浪漫派、今日僕らの『時代青春』の歌である。…
 我が時代の青春！この浪漫的なものの今日の充滿を心情において、捉え得るもの友情である。芸術人の天賦を真に意識し、現状反抗を強ひらし者の集ひである。日本浪漫派は、ここに自体がひとつのイロニーである。」
 —保田与重郎—

各なる苦渋の情況を昭和10年代に重ね合わせれば保田与重郎はいみじくも「一等若い青年のデスパレートな心情」と表現している。かの保田の「混沌未形」からの投射が日本浪漫派であったということである。保田はそれを饒舌に語ることを止めない。「大正時代の終り方から社会主義文芸が勃興したのであるが、これはやはり世界的な風潮であった。そうしてその社会主義の歴史を見ても、我国のそれが国内に於てはかなり豊かで、世界的に言えば貧困なインテリゲンチヤを主体としていたことが、この運動の性格を示している。昭和初年にはジャーナリズムを風靡し、天下の青少年を傘下にした運動も、昭和7・8年頃青年の生活が最悪の失業状態を経験したとき、この青年のヒューマンズムに立った運動は実に極端に頹廢化し、デスパレートとなり、そのデスパレートなものを、真向に権力に向ってたたきつけるすべを見失っていたのである。青年のデスパレートな気持は、その時代よりずっと最近にまで続いた。このデスパレートな気持を追求することの必要は改めて言うまでもないと思う。只昭和7・8年を中心として、時代の青春に遭遇した青年の心情は、その時代が日本の国家が最も悪い状態にあったゆえに、前後に比類ない複雑さを作ったと思う。……

「明治以後の日本の浪漫主義の運動は、この昭和7・8・9年頃に再び起



比島に敵前上陸敢行
 快！米東亞據點に日章旗



日獨伊に重慶官報
 日獨伊に重慶官報

日獨伊に重慶官報
 日獨伊に重慶官報

日獨伊に重慶官報
 日獨伊に重慶官報

空軍基地を夜間爆撃

比島防衛司令官発表
「比島防衛司令官は、空軍基地を夜間爆撃したことを発表し、この爆撃は、比島の防衛に重要な役割を果たしたと述べた。司令官は、爆撃は、比島の防衛に重要な役割を果たしたと述べた。司令官は、爆撃は、比島の防衛に重要な役割を果たしたと述べた。」

ったのである。昭和8・9年頃と言え、6年の満州事変、昭和7年5月事件、やがて11年の東京事件につづく期間である。当時の国家の状態は、肉体による詩的表現によってしか救いたい位に頹廃していたのである。しかもそうした表現は時代を風靡した社会主義によってされず、日本主義の詩的挺身によってされたのである。この時文学上の新運動は所謂日本浪漫派という宣言から出発した。」

この青年のデスパレートな心情を包圍した情況は戦時中、敗戦、戦後、現在と一貫して再生産されてきた昭和の青春を流れる主調低音なのであると《私》は自嘲的に語らざるを得ないというは身勝手な話であろうか。

おしこめられた、正に苦渋の状況から新たな価値を獲得する為にアングエシ、加えて社会的反抗のキバをもつに至る《私》の青春の解放への模索が伝統的心情、《私》の内に伝えられてきた共有の心情に依拠していることは否定しきれないものとして現存し、マルクス主義も「心情の合い言葉」としての意味でしか苦渋の情況にのたうちまわる《私》に関与していないのではないかと思えるのは余りにうがったもの見方と一笑に附せられるであろうか。又、右翼テロリストの「暴力」に対して倫理的に首肯できなくても彼らにとっては精一杯の唯一最高の表現形態ではないのかと評価する《私》に至ってはナンセンスの声を浴びせられることのいたし方なきを知りつつ「日本人の精神にかかわる問題をおおむね倫理的に取上げることに始って審美的にこれを解決するところを終る」という大岡信のドグマを体現する《私》のよき言えば美意を「暗い日本のこころ」に付随するものとし視座様式を構えねばなるまい。

《私》は決して《私》をコケていく世代と称しているのではない。《私》の肉の深奥の動機が、今この時期、噴出してくるのを体感し抑えることができないといたいのである。それこそナショナルの根源と指摘してはばからず容易に料理する評論家面した諸君もあれ、科学的無知による小ブル自己への盲目的過信であると切り捨てる諸君もあるだろう。それらには確かに二の句もつけないが、しかしながら《私》にはいまだかつて《私》が日本人日本民族であるという意識にさいなめられた経験を持った例しがない。そういう意味では《私》は余りにインターナショナルな世代ではないのだろうか。又、論理、論理の服従に対するすげない深奥の反応を、解き明かせない「重し」

として抱いているのである。

そこに素材として日本浪漫派がしのびよってくる情緒的感動を覚えるのである。《私》の行為を実現する可能性の根源にある《私》の情念とは土着であるのか沈黙な魂魂であるのか、これらはある面、近代との対置によって語られねばならないし近代の概念規定が問題とされるのは自明である。近代は生活ではなく西欧それ自体、つまり日本にとっては輸入ヨーロッパ文明という抽象概念でしか捉え切れず日本の近代とは何であったのか、そこに於ける近代の超克とはという歩みより日本を浪漫派(日本的なるもの)への接近から求めたととりあえず置いて置こう。対立概念であるべき正統ではなく土着との対比とされる日本の近代は知識人と大衆との相関係数を提上して行くし、日本浪漫派こと保田与重郎は近代の全面否定が国家の戦争意思の天皇制支配構造に溶解していったのだという点をひとまず述べるに留保する。ここで日本浪漫派をその背景が今日と類似しているからといって現状にあてはめて復元したところで大した意味はない。ここで日本浪漫派をきりきざんで刺身にすることの不可能を知っている《私》は日本浪漫派が外皮とし、又内包した知識人と大衆との間の疎外感に天皇制イデオロギーを持ち出して来た構造を洞察し、その素材への肉迫を企てることに一つの方法を定立し、現在《私》に於ける天皇の存在が内的普遍として位置しているのか、肩代りするものは何か《私》は明確に把握する作業を展開し、それがとりも直さず苦渋の情況から新たな獲得行為と言えらるのではあるまいか。「あきらめない一つの信仰」としての天皇下に育まれた日本人の情念の慟哭を《私》のものとして初めて明日を語れるのだと《私》は共鳴音を鐘らすのである。

ここにしのびよる日本浪漫派を誹り掲げることは歴史の遊戯であろうか。そして《私》は肉の深奥の流動未形を表出させる季節の訪れを橋川文三の言葉と共に笑おうとしているのであろうか。一戦後のいわゆるデモクラシズムの風潮にもかかわらず(それ故にか)日本浪漫派の提出したはかないような問題意識はそれとしてどこか奥底の方でよんでいる感じを私はいまだく。それは恐らく、いわゆる反動復古主義の動向とはかかわりない形でそれに随伴する迷説的な否定的エネルギーとして再び同じ精神史上笑うべきドラマを現わすかもしれない。かつてそれがあったと同じ意味でしかも自らが再び登場することの愚劣さを自らのイロニイとして――

苦渋の情況から新たな獲得への前奏を《私》は始めようと思う。

レイアウト写真は昭和16年12月11日付朝日新聞の夕刊です。



臨時開議開かる
外相所管事項報告
三動令案を審議

華息
3割12割

先勝は勝はす級の閉結肝要
英米以外に對し
何等の驚かし
水曜日の
先勝は勝はす級の閉結肝要
英米以外に對し
何等の驚かし
水曜日の